

## MIURA

～三浦半島の魅力を捉え直すためのコンセプトブック 抜粋～

### CONCEPT ～三浦半島のコンセプト～

“あるがまま”を楽しむ

都会は、忙しい。効率的に仕事をこなして、また次の日を迎える。そんな慌ただしい日々から逃れたい人には、三浦半島はぴったりだ。ここでは、みんなが自然体で生きている。観光地のように、お店を開ける時間がしっかりしていなければ、店員も“店員として”振る舞おうとしない。定休日でないのにお休みのことがあれば、店員との距離も近い。気さくに話しかけてくれる個性的な住人も多く住んでいる。そんなゆるい空気感をまとった三浦半島では、当初の旅行の計画が崩れてしまうことがある。だが、その“ゆるさ”が思いがけない出会いを生む。計画にはなかったお店やエリアに足を運ぶことで、新しい出会いが生まれる。思い通りにならないことも、旅の醍醐味のひとつだろう。

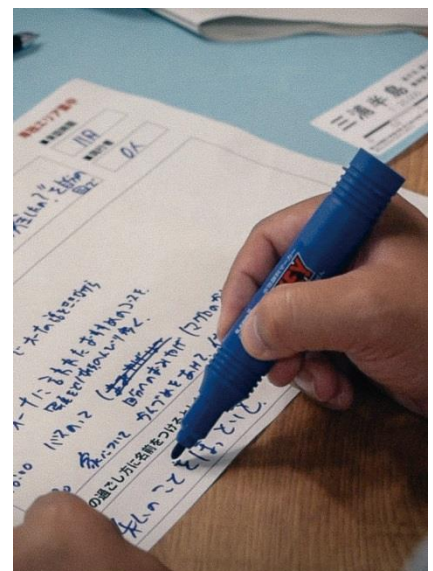
三浦半島の空気に触れて「そんなに頑張らなくていい」と気づけば、心にも余裕ができるはずだ。三浦半島は観光地化されていないからこそ、遊びをつくっていく余白がある。三浦半島は、都会から近い“秘境”だ。都会では出会えない心を揺さぶる景色や海岸を楽しめる。そんな素材をどのように料理し、楽しむかを考える。すると、人とは違う新しい使い方を見つけられるはずだ。クリエイティビティを発揮して、自分なりの遊び方で三浦半島をめいっぱい楽しもう。



### WHAT IS PERSONA ～ペルソナとはなにか～

・ペルソナとは

企業が製品やサービスを提供する際に、それを使う象徴的なユーザーモデルを「ペルソナ」と呼ぶ。ペルソナを設定する際は、氏名や年齢、性別、職業、年収、家族構成などの定量的な要素と、価値観、趣味嗜好、消費行動、情報収集方法、ライフスタイルなどの定性的な要素を組み合わせる。その人間が本当に存在するかのようにリアリティを持って描くことで、その製品やサービスがどのようなユーザーに使用されるのかを明確化。今回のプロジェクトでは、ターゲットユーザーのインタビュー、フィールドワークなどを踏まえた上でペルソナを作成した。



・ペルソナを作成する理由

三浦半島を訪れる人は様々だ。家族連れもいれば、友人同士で旅行に来る人も。その全員が同じスポットを訪れるわけでもない。具体的なペルソナを描き、そのペルソナが三浦半島を訪れたときのストーリーをつくることで、その人にとっての三浦半島の魅力や足りない要素を浮き彫りにする。そして、その要素を三浦半島での体験をより良いものにするきっかけとして使用した。ペルソナにとっての魅力的な経験シナリオを「カスタマージャーニー」と呼ぶ。

## PERSONA 1 ～2人のペルソナ～

橘 久美子

### 【PROFILE】

年齢：33歳

性別：女性

居住地：小田急豪徳寺駅徒歩10分1R家賃7.5万

出身地：静岡県

家族構成：一人暮らし(実家には父母妹)

パートナー：独身

所属：編集業

役職：なし

収入：年収450万円



### 【MIND STORY】

大学を卒業して、憧れだった出版社に入った。

仕事は楽しいけれど、人間関係や色んな調節ごと、毎朝の満員電車とか、慌ただしい日々の中で色んなストレスがある。同僚にも気を使ってしまって仲良くなれない。

気を許せるのは学生時代からの友だちだけ。でも、徐々にその仲間も結婚しだして、つい疎遠になってしまった人もいる。私といえば、3年前から彼氏がない。休日はふたりで一緒に色んなところに出かけていたのに、いまはひとりで出かけることが多くなった。

人に合わせると疲れるから、別にひとりでもいい。でも、やっぱり寂しい。そんな私を救ってくれたのは、いつも映画や本だった。だから、そのつくり手にまわれる仕事は楽しい。

仕事の帰り下北沢に寄ってみると、三浦半島を撮ったZINEが売っていた。手にとってページをめくると、ざらついた写真の質感と三浦半島の雰囲気相まって、その昭和のような世界観に心惹かれた。まるで都会の喧騒とは縁がないような世界だった。

よく考えれば「三浦半島」は都心から近いのに、遊びに行ったこともない。今度の週末で行ってみることにした。

## PERSONA 2 ～2人のペルソナ～

加藤 健太

### 【PROFILE】

年齢：27歳

性別：男性

居住地：吉祥寺

出身地：宮城県仙台市

家族構成：4人（弟がいる）

パートナー：独身（2年同棲した1歳年下の彼女と別れた）

所属：フリーランスになって、1年半

役職：デザイナー（UI/UXが専門）

収入：年収400万円



### 【MIND STORY】

自分の好きだった「デザイン」を仕事にできている。でも、忙しく働く中で会社でバリバリと仕事するのが、なんとなく向いていないとも思っていた。独立すれば自分のペースで仕事ができるんじゃないか、そう考えて会社を辞めた。デザイン会社である程度経験を積めたし、食べていくには困らないはずだ。

でも、いつの間にか会社員の頃よりも忙しく、給料も上がっていない。何よりも、クライアントに言われたものを作るだけ。まるで“下請け”“みたいで納得のいく仕事なんて、できていない。

本当は使いやすく、人々の生活を変えるようなサービスをデザインしたいだけなのに、クライアントの要望に応えるだけでは、そんな理想のアウトプットから遠のいてしまう。

いまの仕事を辞めるつもりはないけれど、このままの生き方でいいのかな。でも、毎日仕事で忙しくて、落ち着いて考える時間もない。

打ち合わせの帰りに、品川駅で三浦半島のポスターを見かけた。そのポスターになんとか心惹かれた。美味しいマグロも食べたいし、仕事のリフレッシュも兼ねて行ってみることにした。

### 3 VALUE FOR PERSONA ～ペルソナが惹かれる三浦半島の3つの魅力～

1) 偶然の出会いが、旅を意図せぬ方向に導く  
三浦半島に行くと、定休日ではないのにお店が閉まっていることもある。当初の計画が崩れてしまったと、落胆するのはまだ早い。他のお店にふらっと入ってみると、このエリアだとどこがおすすめかを教えてくれる店主と出会えたりする。旅の計画にはなかった偶然の出会いが、その旅を思わぬ方向に導いてくれる。意図しない出会いも、旅の醍醐味のひとつだ。



2) “都会の秘境”をめいっぱい楽しむ  
近くにある観光地と異なり、三浦半島には整備されていない部分も多い。その中でも、ありのままの自然は、ぜひ楽しみたいポイントだ。三崎港の近くにある人が多くない海岸や、小網代の森、そして辺り一面に広がる畑が、その情緒をもたらしてくれる。作り込まれていない世界には、その世界なりの楽しみ方があるだろう。



3) 哲学を持った個性的な住人の“手づくり”感  
三浦半島で新しくお店を開いたり、イベントを開催したりする人にはユニークな人が多い。だって、まだ開拓されていない土地を自らの手で切り開いているのだから。各人が個人プレーで新しい挑戦をして、その集合体が三浦半島となっている。葉山、横須賀、三崎と各エリアによって個性が異なるのは、これが原因だろうか。ユニークな挑戦者に寛容なエリアとも言える。



### 4 POINT OF PERSONA'S JOURNEY

～ペルソナが経験した三浦半島旅の4つのポイント～

#### ・「もっと気楽に生きていい」と諭される旅

古道具屋の店主や、銭湯のソフトクリームをつくってくれたおばさんと会うことで、三浦半島は失敗を許容してくれる環境だと感じられる。それは、都会で忙しく働く橘久美子にとって「もっと気楽に生きていい」と諭してくれるような出会いだ。

#### ・「自分もこうなりたい」と憧れる人に出会う旅

レトロな飲食店や街の小さな映画館に足を運ぶと、その空間から店主のこだわりが伝わってくる。そこには、経済合理性じゃないオルタナティブな生き方がある。確固たる哲学を持つ人々に、憧れてしまう。自分も新しい挑戦をしたい、橘久美子はそう思うようになった。

・多様な営みに触れて、新しい生き方を見つける旅

加藤健太は、三崎口で多様な人々の営みに触れる。漁師や農家などは、東京で暮らしていたら触れ合わないような人ばかり。その営みを眺めることが、自分にはもっと多様な選択肢が存在するのではないかと、考えるきっかけになった。

・対話を通じて、自分の人生を相対化できる旅

加藤健太は、移住者の開いたカフェや横須賀の酒場で普段会わないような人と出会う。話をする中で、世の中にはもっと多様な生き方があると知り、自分の人生が徐々に相対化されていった。「移住する」という選択肢を知れたのが、大きな収穫だ。

※当資料に掲載されている画像等の無断転載はご遠慮下さい。